

乗谷を歩くなら、いい地図があったほうがいい。この地図の存在は事前に知っていたが、やはりここに置いてあった。

一乗谷朝倉氏遺跡

戦国時代に一乗城を中心に越前国を支配した戦国大名「朝倉氏」の遺跡。遺跡全体（面積 278 ヘクタール）が国の特別史跡となっており。戦国時代の町並みがほぼ完全な姿で発掘されている。

江戸時代から大正年間に至るまで、遺跡の一部が現存、露出していた。1967年、文化庁の指導のもとに庭園の整備・調査が行われ、地下から見事な庭園が発掘。発掘調査の結果、礎石や庭石が次々と発掘され、その保存状態が大変良いため遺構を全面発掘された。

今は発掘された一部に当時の町並も復元されている。



一部復元された街並み

日本のポンペイ

戦国時代、織田信長と争った朝倉義景は敗れ、朝倉家の城下町だった一乗谷も焼き払われた。織田信長、浅井長政、お市の方・・・このあたりの話は戦国ストーリーやNHK大河ドラマでもたびたび登場する。こうして一乗谷遺跡は忘れられた土地として長い間、農地の下に眠ることになる。



当時の暮らしぶりも蘇っている

特別史跡をO-mapで巡る

特別史跡であることから、現地のパーマネントコースの目印となるフラッグ設置が禁止されている。こうした場所にオリエンタリングコースを設置するために福井県オリエンタリング協会が出した答えが「フォトオリエンタリング」。地図のコントロール位置に行くに見える風景写真を地図にも印刷し、これと同じ写真をデジタルカメラで撮影していただくことを課題として設定している。今はやりのフォトログイニング方式だ。パーマネントコースが始まった昭和の時代には考えられなかった手法である。

トレイルO感覚

地図縮尺は1:4,000、ISSOM準拠の地図一つつまりスプリントOやトレイルOの地図仕様だ。A4地図2枚分を大きな一枚のパムフレットに印刷してある。パーマネントコースでは普通ありえないような細かな地図だ。「なぜ？」

それは現場に足を運んでみるとすぐに判った。一乗谷は戦国時代の館と城下町の遺跡。人工的な複雑な地形が広がっている。これをきちんと案内するためにはISSOM仕様の地図が最適だったのだ。この地図のおかげで、ただ広いだけの草原の中で緻密な屋敷跡を辿ることができる。空地が、空間が、400年の時を超えて当時の生活を語り始める。

そして、精密地図の丸の中心に行き、メートル単位で歩幅を調整すると、地図に掲載された写真と全く同じ風景がピタッと展開する。デジャヴ・・・既視感・・・この感覚はトレイルO・・・トレイルOパーマネントコースだ。ここは。

静かな梅雨の一乗谷

時には晴れ、時には激しく雨が降る。梅雨時の安定しない天気の中、夢のような感覚の中、すべてのコントロールを巡って博物館に帰着。「一日で全部回った人はいないよ」と言われてしまった。

オリエンタリングのコースではないが、一乗谷の横にある一乗山の山城跡にも登ってみた。こちらは遺跡というより標高450mを一気に登るガッツな登山だった。

(木村佳司)



一乗山城跡。標識があるだけで、展望は無い。戦国時代にはこんな険しい山城を備える必要があったのかと、備えの強さを改めて感じた。



高台から一乗谷遺跡を望む。この写真アングルも、地図で指定された撮影ポイント。